

改・シンディ

日下部 メイコ

「今度の学芸会でシンデレラをやることになったんだ。ちょっと脚本を書いてきてくれないか」

学校の教員をしている友人からそういわれたのは飲み屋でのことで、いい気分だった私はなにも考えずに頷いていた。翌朝、とんだ安請け合いをしてみたその後悔したが、酔った状態とはいえ一度引き受けたものはやり遂げねばならぬ、と早速脚本づくりに着手した。

「本当に書いてもらえるとは思わなかったよ。いや悪い悪い」

一週間ほどで脚本を書き終えた私は、友人に連絡して近所のファミレスで落ち合うことにした。待ち合わせから二十分ほど遅れてきた友人はウエイトレスにステーキセットを注文すると水をがぶ飲みした。

「悪いな、試合から帰ってきたばかりでまだ昼飯を食べてないんだ」

今日は顧問をしているミニバスの試合があったので、隣市まで出かけていたそうだ。休日まで大変なことだ。感心

すると、好きでやっているからなあと友人は笑った。そうこつするうちにステーキセットが運ばれてきて、友人は食事にかかりきりになった。食べ終わってから脚本を書いたきたノートを見せようとしたのだが、聞けば夜からもまた出かけなければならぬというので、食事をしている友人に私が読み聞かせることになった。

シンデレラ、と題名を読み上げた瞬間に、友人から待ったの声がかかった。

「シンデレラをやることになってから自分なりに調べてみたんだが、『シンデレラ』には『灰かぶり』の意味があるんだらう？ もしかしたらこれが元でいじめが起きてしまうかもしれないから、違つ名前にしなないか。例えば、そうだな……シンディとか」

言われてみれば確かにそうかもしれない。私はノートの表紙のシンデレラの上からシンディ、と朱書きした。

ノートを持ち直し、私は再び読み始めた。

むかしむかし、あるところに女の子がおりました。

名前はシンディといました。シンディにはお父さんがおりましたが、お母さんは早くに亡くなっていたのでおりませんでした。シンディとお父さんは仲よく暮らしていましたが、お母さんのいないシンディをかわいそうに思ってお父さんは新しく奥さんをもちうことにしました。新しくもちった奥さんにはふたりの娘がいたのでシンディはふたりの姉さんを持つことになりました。しかし、結婚してし

ばらくするとお父さんは病気で亡くなってしまいました。すると、今までやさしかった継母は突然冷たくなり、上の姉さんふたりもシンデイにつらく当たって、三人でシンデイをいじめるようになりました。

「ちょっと待っててくれないうか。それはただけないうか」

と、途中で友人がまた待ったをかけたので、私はなにがいけなかつたのかを尋ねた。友人は数回瞬きをして唸ったあと、個人情報にかかわるからあまり詳しくは言えないのだが、と前置きをして話し始めた。

「うちの学級に親と死別した子と親が離婚した子、あと再婚した親の子どももいるんだ。その話だと問題になるかもしれないな」

なるほど、頷ける。それはデリケートな問題だ。死別、再婚をノートにメモしてバツをつける。

「あと、継母と姉さんふたりがシンデイをいじめるだろう。いじめを助長させる恐れがあるから、そこは削ったほうがいいかもしれないな」

私は頷きながらいじめの文字の上に大きくバツをつけた。

むかしむかし、あるところに女の子がおりました。名前はシンデイといました。両親も健在で、みんなで仲よく暮らしていました。

「いや、ちょっと待っててくれ、両親が健在で仲がいいこと

を強調するの逆にも悪いかもしれないな」

確かに。私はノートに強調しない、と書き加えた。

さて、ある日シンデイのところにお城から舞踏会の招待状が届きました。

私はそこで読むのをやめた。なぜなら、意地悪な継母も姉もいないシンデイは障害なく舞踏会にいけないからである。不思議そうに続きを促す友人に、私は事情を説明した。すると友人は腕組みをして唸った。

「そうか、舞踏会にいけないようになるようなできごとがなければいけないのか……」

ふたりしてしばらく悩み、私はひとつの案を思いついた。舞踏会は夜遅くまで開かれているので、まだ子どものシンデイは参加してはいけないと両親に禁止される、というものだ。それを伝えると、友人は首を振った。

「それだとシンデイは親の言いつけを破って出かける悪い子どもになってしまうだろう。それに、夜遅くに歩かなくて演じる子どもたちに悪影響を与えてしまうかもしれないし……舞踏会の開催は昼にしよう。それで、シンデイは招待状を誰かにあげてしまうのはどうだろう。招待状をなくしてしまった友だちに自分のぶんをあげてしまうから舞踏会にいけない。これだとシンデイがとても心の優しい子どもだということも伝えられるな」

なるほど。そのやさしさに感動した魔法使いがやってき

て、シンディに招待状とドレスを出してあげるのもいいかもしれない。

「そうだな、それなら友だちに招待状と一緒にドレスもあげてしまったことにしよう。うん、これならいいな」

満足げに頷いたので、私は続きを読み始めた。

そうして魔法使いにドレスと招待状を出してもらったシンディはお城の舞踏会に行きました。そこで知り合った王子さまと一緒に踊ったりしていると、お城の鐘が十一時四十五分を知らせるのが聞こえました。

「そこでさっきの門限の話を出したらいいんじゃないか。まじめな子だということが伝わってくる」

シンディは急いで家に帰ることにしました。お昼の時間までに戻らないと、きつとお父さんとお母さんが心配してしまいます。けれどもあわてていたシンディは、お城にガラスの靴を落としてきてしまいました。王子さまはもう一度シンディに会いたくて、そのガラスの靴を頼りにシンディを探すことにしました。ようやくシンディを見つけ出した王子さまはシンディに結婚を申し込み、ふたりは未永くしあわせに暮らしました。めでたしめでたし。

読み終わると、友人は難しげな顔で考え込んでいた。どうしたのかと尋ねると、結婚してふたりは本当にしあわせ

になれたのだろうか、と反対に尋ねられてしまった。

「このふたりは舞踏会で出会って、ほとんど一目惚れのような状態だったんだろう。果たして一目惚れしあったもの同士がすぐに結婚してうまくいくものだろうか。そもそも、シンディは王子を好きだったのが不明じゃないか？ 王子はガラスの靴を頼りにシンディを探すほどだから好きかもしれないが、シンディはこれでしあわせなのか？」

確かに、言われてみればそこは不明確だ。

「シンディがどんなふうに思っていたのか心理描写がほしいところだな。気にはなっているかもしれないが、好きかと聞かれたら答えられない、みたいな感じの葛藤もほしい。愛が育っていく過程というものはリアルにしなければならぬ。これは重要なところだぞ」

そうだ、生半かな愛では演じる子どもたちも納得しないだろう。

それから喧々囂々の白熱した議論を経て、脚本は完成した。

こうして諸国を放浪したシンディは、もうずいぶんなおばあさんになっていました。国に帰ると、あの王子さまは王さまを引退して静かに余生を送っていました。今は甥っ子が代わりに王さまをしています。今の王さまからの招待状でシンディがお城に行くと、そこにはすっかりおじいさんになってしまったかつての王子さまがいました。そこで一万回目の結婚の申し込みを受けたシンディは初めて

はいの返事をしました。そうしてふたりは未永くしあわせに暮らしました。めでたしめでたし。

しばらくして、友人から連絡があった。学芸会で発表するのに、魔法使い役を手伝ってほしいというものだった。しかし、それでは役にあぶれてしまっ子が出るのではないかと尋ねたが、友人は豪快に笑い飛ばした。

「ああ、そんな心配は無用だよ。みんなシンディ役だからな。なぜって、主役とそうじゃない役があったら不公平ってもんだろ。みんな平等にするにはみんなが主役をするのが一番いいだろう？」

確かにその通りだと思った。